

高齢者の親密度向上に関するアンケート調査と 支援技術の検討

川崎仁史^{†1} 高橋公海^{†1} 前田篤彦^{†1} 中村元紀^{†1}

概要：本研究では、高齢者の社会的孤立を防止するための友人作りの活動に注目し、高齢者の親密度向上を ICT によってどのように支援できるかを把握するために、Web によるアンケート調査を、高齢者 412 人を対象に行った。調査では、最近新たに友人を作りたいと思ったことがあるができていない高齢者 206 人に対して、できない理由等について質問し、最近新たに友人ができた高齢者 206 人に対して、友人と親しくなったきっかけや親しくなるまでに会った回数等について質問した。調査の結果、友人ができない理由については、きっかけがないことが最も多いことが分かった。また、友人と出会うきっかけや場所については、趣味に関する場が多く回答された。親密度向上のきっかけとして多く挙げられたものには、一緒に活動・会話することや、共通の趣味・価値観・属性、偶然性等があった。また、親密になるまでに会う回数は約 3 回であることが分かった。結果をもとにして、高齢者の親密度向上支援モデルを構築した。同モデルに基づき支援技術について検討を行った。

キーワード：高齢化社会，コミュニティ形成，親密度向上

Questionnaire Survey and Supporting Technology for Enhancing Seniors' Friendships

HITOSHI KAWASAKI^{†1} MASAMI TAKAHASHI^{†1}
ATSUHIKO MAEDA^{†1} MOTONORI NAKAMURA^{†1}

1. はじめに

近年、高齢者の増加とともに世帯主が高齢者である世帯数のさらなる増加も予想されており、国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、総世帯数に占める世帯主が 65 歳以上の世帯数の割合は、2010 年の 31.2%から 2035 年には 40.8%へと大幅に上昇するとされている[1]。さらに、世帯主が 65 歳以上の世帯について、2010 年から 2035 年の家族類型別割合の変化をみると、最も上昇の割合が大きいのは単身世帯であり、30.7%から 37.7%まで増加すると見積もられている。内閣府が 60 歳以上の人を対象に実施した調査の結果によると、電話や E メールを含めて毎日会話する人の割合は、単身世帯以外では 9 割台後半を占めているのに対し、単身世帯では 65.4%にとどまっている[2]。そのような状況のなか、高齢者の社会的孤立の防止につながる高齢者の友人作りの活動が注目されている[3, 4, 5]。しかしながら、高齢者のなかには、どこに行き、何をすれば友人ができるのかわからない人もいることが指摘されている[3]。

本研究では、高齢者の友人作りを ICT によってどのように支援できるかを把握するために、Web によるアンケート

調査を、高齢者 412 人を対象に行った。対象の高齢者は、事前調査の回答者のなかから無作為抽出で選定した。調査では、ここ 1 年で新たに友人を作りたいと思ったことがあるができていない高齢者 206 人に対して、できない理由等について質問した。それにより、友人ができない高齢者に対して、どのようにその理由を取り除くよう支援できるのか検討した。また、ここ 1 年で新たな友人ができた高齢者 206 人に対して、友人と親しくなったきっかけや親しくなるまでに会った回数等について質問した。それにより、高齢者同士の親密度を向上させるためにどのような支援ができるのか検討した。

以下に本稿の構成を示す。2 章で高齢者の社会的孤立の防止や親密度向上に関する従来研究について述べる。3 章で我々が行ったアンケート調査の方法を説明する。4 章でアンケート調査の結果を報告したのち、5 章で結果の考察や、高齢者の親密度向上のために有効そうな ICT について検討する。最後に 6 章で本稿のまとめについて述べる。

2. 従来研究

高齢者の社会的孤立やその防止としての社会参加に関する研究は老年学（英語では gerontology）の分野で近年盛

^{†1} 日本電信電話株式会社 NTT 未来ねっと研究所
NTT Network Innovation Laboratories,
NTT Corporation

んに進められている。この分野で歴史ある学会誌として、1979年から発行されている「老年社会科学」がある。その学会誌の最近約3年分（Vol. 34, No.1 から Vol.37, No.1）の論文（原著論文，資料論文），論壇の69本を確認したところ，高齢者の社会的孤立や，社会参加，友人関係に関するものが少なくとも16本見つかった[6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21]。このように全体の2割以上を占めるテーマとなっており，高齢者の社会的孤立や社会参加，友好関係にどのような傾向があるか，過去の経験や環境の変化が社会参加にどのように影響するかといったことについて研究されている。

従来研究のなかで，和田の調査により，高齢者の友人関係においては，気楽な関係と有用な関係があるほど主観的幸福感が高くなることが確認されている[6]。気楽な関係は，互いに負荷をかけない気楽な友人関係を表し，有用な関係は，自己を向上させたり共に行動したり協力したりするうえで有用で役立つ友人関係を表している。また，岡本の調査により，趣味等の仲間内活動への関与が高齢者の活動満足度を大きく上昇させる傾向が確認されている[11]。活動満足度尺度は，高齢者の社会活動全般の満足度を把握するために岡本が開発した尺度である。さらに岡本は，高齢者の友人・知人の獲得に着目して，どのような特性の者が新たな友人を獲得しやすいのかについて要因の調査と分析を行っている[22]。その調査の結果，趣味の会等仲間内の活動や，友人とのつきあいをしている人ほど，新たな友人を得やすいことが確認されている。

以上で確認されている結果は，高齢者の友人作りをどのように支援できるかを検討するうえで，非常に参考になるものである。しかしながら，ICTによる親密度向上の支援や促進を考えるうえでは，友人関係の性質や，友人を作りやすい人の性質だけではなく，さらに具体的な知見が必要になると考える。なぜならば，ICTによって，どのようにユーザに働きかけるのかを明確にする必要があるからである。我々は，最近新たに友人ができていない高齢者に対して，できない理由を尋ねることによって，どのようにその理由を取り除く働きかけができるのかを検討する。また，最近新たに友人ができた高齢者に対して，親しくなったきっかけ等を尋ねることによって，どのように働きかけると高齢者同士の親密度が高まるのかを検討する。

3. アンケート調査の方法

3.1 調査方法

我々は412人の被験者（最近新たに友人ができていない高齢者206人，最近新たに友人ができた高齢者206人）に対して，Webアンケートを実施した。事前調査は2015年8月25日から26日，本調査は28日から31日の期間であった。

表1 友人ができた／できない被験者の属性

	できない	できた
年齢		
平均値±SD（歳）	70.1±4.7	70.2±4.7
性別		
男性（人）	144	129
女性（人）	62	77

被験者は，株式会社マクロミルに登録している日本全国のモニターから選定した。まず事前調査として，65歳以上の4万人のモニターに事前調査への協力を電子メールで依頼した。事前調査では「ここ1年で，新たな友人を作りたいと思ったことがあるか」と「ここ1年で，新たな友人ができたか」を質問した。なお，友人は「仕事やビジネス以外の目的で一緒に会話や行動を共にすることがある人」との説明を加えた。1万人の回答が集まった時点で事前調査の回収を打ち切り，新たな友人ができたと回答した高齢者と，新たな友人を作りたいと思ったことがあるができていないと回答した高齢者から，それぞれ206人を無作為で抽出し，本調査を行った。なお，抽出された被験者の属性は表1のとおりとなった。

3.2 調査項目

本調査では，最近新たに友人ができていない高齢者に対して，以下の項目に回答してもらった。

- 新しい友人がなかなかできない理由は何だと思うか（時間がない，きっかけがない，健康上の理由，近所に人がいない，人見知りである，プライドが邪魔をする，その他，から複数選択）
- どういうきっかけがあれば友人ができそうか（友人，知人の紹介，店舗や病院等の施設で一緒になる，旅行で一緒になる，趣味や娯楽に関係した活動への参加，地域活動やボランティア活動への参加，その他，から複数選択）
- 地域活動，ボランティア等複数の方が参加するイベントに参加しているか（はい，いいえ，から単一回答）
- 地域活動，ボランティア等複数の方が参加するイベントに参加していない場合，参加しない理由は何か（友人，知人がいないので行きにくい，行ってもメリットがない，魅力を感じない，面倒くさい，付き合いたくない人がいる，その他，から複数選択）

はい，いいえで答えられる3つ目の質問を除いて，位置偏向（選択肢が提示されている順番にとらわれて選択すること）を考慮し，選択肢の順番を順不同にした。

一方，最近新たに友人ができた高齢者に対しては，以下の項目に回答してもらった。

表2 友人ができない理由（複数回答）

回答の内容	回答数
きっかけがない	164
人見知りである	63
近所に人がいない	33
健康上の理由	23
時間がない	15
プライドが邪魔をする	11
その他	18

表3 友人ができそうなきっかけ（複数回答）

回答の内容	回答数
趣味や娯楽に関係した活動への参加	172
地域活動やボランティア活動への参加	78
旅行で一緒になる	60
友人、知人の紹介	58
店舗や病院等の施設で一緒になる	34
その他	4

- ここ1年で何人くらいの新たな友人ができたか（自由回答）

以下は、ここ1年でできた友人の中で、最も親しい友人一人を思い浮かべてもらい回答してもらった。

- その友人とは何回くらい会って親しくなったか（自由回答）
- どこでその友人と知り合ったか（自由回答）
- その友人と親しくなったきっかけは何か（自由回答）
- その友人のどういうところに好意を感じるか（自由回答）

4. アンケート調査の結果

4.1 友人ができていない高齢者

友人を作りたいと思うが、最近友人ができていない高齢者の、新しい友人ができない理由についての回答を表2にまとめた。回答数の総和が回答者数（206人）よりも多くなっているのは、複数回答だからである（以降で述べる表3及び4についても同様）。表2より、「きっかけがない」ことが他の回答の倍以上に多い結果となった。「その他」を選択し、その内容について自由回答してもらったものとしては「既存の友人との交流に忙しい」「転居してきて間もない」「あまり外出しない」「自分の年齢」等の回答があった。

どういうきっかけがあれば友人ができそうか、についての回答を表3にまとめた。表より、「趣味や娯楽に関係した活動への参加」が他の回答の倍以上に多い結果となった。

地域活動、ボランティア等複数の方が参加するイベント

表4 イベントに参加しない理由（複数回答）

回答の内容	回答数
魅力を感じない	66
友人、知人がいないので行きにくい	49
面倒くさい	48
行ってもメリットがない	12
付き合いたくない人がいる	9
その他	27

に参加しているかについては、59人が「はい」、147人が「いいえ」と回答し、最近新たに友人ができていない高齢者の7割以上がイベントに参加していないという結果になった。「いいえ」と回答した147人に対してはイベントに参加しない理由についても質問し、その回答について表4にまとめた。表より、「魅力を感じない」が最も多く、次いで「友人、知人がいないので行きにくい」「面倒くさい」という回答が多い結果となった。「その他」を選択し、その内容の自由回答で多かったものとしては、イベントがない・少ない・知らないといった回答が8件、健康上・体力の問題といった回答が7件挙げられた。

4.2 友人ができた高齢者

この節では、最近新たに友人ができた高齢者に対して回答してもらったアンケートの結果について記述する。

ここ1年でできた友人の数についての回答を表5にまとめた。友人の数について、中央値:3、平均値:5.6、標準偏差:26.4、最小値:1、最大値:380という結果になった。380人と答えた方は、友人とSNSで知り合ったと答えている。また、380の次に大きい値は20であった。

親しくなるまでに会う回数についての回答を表6にまとめた。回数について、中央値:3、平均値:4.6、標準偏差:4.5、最小値:1、最大値:30という結果になった。また3回と答えた方が最も多く、全体の32%を占めた。

新しくできた友人とどこで出会ったかについての回答（回答数が5以上のもの）を表7にまとめた。回答の内容は被験者による自由回答を我々が分類したものである。表のように、趣味に関するものが多く回答された。趣味（会・サークル・クラブか不明）には、「趣味を通して」「卓球で」「コーラス」のように趣味を単体で回答したものや「スポーツジム」「ゴルフ場」のようにスポーツ施設の回答を分類した。趣味の具体例として多く挙げられたものとしては、ゴルフ（11回）、散歩・ウォーキング（10回）があった。

新しくできた友人と親しくなったきっかけについての回答（回答数が5以上のもの）を表8にまとめた。回答の内容は、友人と出会った場所と同様に、被験者による自由

表5 ここ1年でできた友人の数

人数	回答数
1	40
2	46
3	56
4	9
5	25
6	3
7	4
8	2
9	0
10以上	21

表6 親しくなるまでに会った回数

回数	回答数
1	19
2	40
3	66
4	11
5	33
6	3
7	2
8	3
9	0
10以上	29

回答を我々が分類したものである。「物の考え方が同じで、同年齢」というように、一人で複数の項目を挙げる回答者がいたが、その場合、複数回答として、価値観・考え方が同じ・近い、属性が同じ・近い、の2項目の回答数を一つずつ増やすこととした。表のように、一緒に活動、会話を通じて、が特に多く回答された。価値観・考え方が同じ・近いには「同じ価値観」「考え方が一致した」という抽象的な回答とともに「作家の興味が一緒」「好きな音楽やドラマが一緒だった」等の具体的な回答も分類した。趣味が同じ・近いには「共通の趣味」「同じ趣味」という抽象的な回答とともに「魚釣りの趣味が同じだった」「趣味が一致(旅行)したから」等の具体的な回答も分類した。属性が同じ・近いには、年齢、住所、出身地、出身の学校等が同じ、近いという回答を分類した。偶然性には、「アスレチックジムでボディジャムの列がたまたま隣になって話かけてきた」「ゴルフコンペで同組になり」「50年ぶりに会って」等に「偶然」「たまたま」を含むものや「隣になった」「同組になった」「再会した」という内容を含むものを分類した。

表7 新しくできた友人とどこで出会ったか
 (回答数が5以上のもの)

回答の内容	回答数
趣味(会・サークル・クラブか不明)	57
趣味の会・サークル・クラブ	35
習い事・教室・講座	22
地域活動や自治会	14
ボランティア	12
近所	9
同窓会	6
ネット・SNS	5
旅行中・海外滞在中	5

表8 新しくできた友人と親しくなったきっかけ
 (回答数が5以上のもの)

回答の内容	回答数
一緒に活動	83
会話を通じて	50
価値観・考え方が同じ・近い	29
趣味が同じ・近い	27
属性が同じ・近い	27
偶然性	24
食事を通して	11
何かをしてあげた・教えてあげた	6
活動の合間・後の交流	5
自然と・なんとなく	5

新しくできた友人のどういうところに好意を感じるかについての回答(回答数が5以上のもの)を表9にまとめた。回答の内容は、友人と出会った場所と同様に、被験者による自由回答を、我々が分類したものである。親しくなったきっかけと同様に「やさしさ、共通の趣味」というように、一人で複数の項目を挙げる回答者がいた。その場合、複数回答として、性格・人柄・人間性、趣味が同じ・近い、の2項目の回答数を一つずつ増やすこととした。表のように、性格・人柄・人間性が最も多く回答された。また、親しくなったきっかけと同様に、価値観・考え方が同じ・近い、趣味が同じ・近い、属性が同じ・近い、に分類できる回答もあった。なお、性格・人柄・人間性については、「性格」「人柄」「人間性」という抽象的な回答と「前向き」「親切」という具体的な回答を分類した。性格・人柄・人間性の具体的な回答として回答数が5以上のものをさらに分類し、表10にまとめた。

表9 新しくできた友人のどういうところに好意を感じるか（回答数が5以上のもの）

回答の内容	回答数
性格・人柄・人間性	155
価値観・考え方が同じ・近い	24
経験・知識が豊富	14
趣味が同じ・近い	13
属性が同じ・近い	9

5. 考察

5.1 友人ができていない高齢者からの知見

表2より、最近新たに友人ができていない高齢者の、友人ができない理由は、きっかけがないことが圧倒的に多い結果となった。2番目に多い回答の倍以上の回答数であり、回答者の約8割が選んだ答えになる。このことから、最近新たに友人ができていない高齢者に対する、できない理由を取り除く効果的な働きかけは、きっかけを与えることであると考えられる。

どういったきっかけがあれば友人ができそうかについては、表3より、趣味や娯楽に関係した活動への参加が圧倒的に多い結果となった。一方、友人ができた高齢者の結果でも、友人と出会った場所として、表7のとおり、趣味に関する場が最も多かったことから、趣味に関する複数人が集まる活動に参加することは、友人を作る良いきっかけになることが強く示唆される。趣味は一般的に自由時間に、好んで習慣的に行われるものであり、自由時間を比較的多く持つ退職後の高齢者にとって関心の高い事柄であると考えられる。また、趣味を共有できるということは、一緒に活動・会話する時間を楽しく継続的に共有できる可能性が高く、価値観が共通する可能性が高いように考える。

しかし、最近友人ができていない高齢者の7割以上は複数の人が集まるイベントに参加していないことにも注意を向ける必要がある。表4にあるように、複数人が集まるイベントに参加しない理由としては、魅力を感じない、友人・知人がいないので行きにくい、面倒くさいという順で回答が多かった。加えて、その他を選び自由回答された内容の中で多かったものは、イベントがない・少ない・知らない、健康上・体力の問題であった。魅力を感じていない理由としては、友人ができていない高齢者にとって既知のイベントが本当は価値あるものだったとしてもそれに気づけていないか、そもそも既存のイベントには彼らの趣味にマッチしたイベントが存在しない、あるいは非常に少ないため見つけられないという可能性が考えられる。友人・知人がいないので行きにくいという理由からは、そもそも初期の時点で友人が少ないと、それ以上社会的な繋がりを広げてい

表10 好意を感じる場所として挙げられた性格・人柄・人間性の内訳（回答数が5以上のもの）

回答の内容	回答数
話しやすい・気楽に会話	15
前向き・積極的	11
親切・思いやりがある	11
素直	9
真面目	9
穏やか・温厚	9
気さく	8
気配り	7
気を遣わない	6
飾らない	6
誠実	5
明るい	5

くことが困難であることが見て取れる。また、イベントへの参加が面倒であるという理由からは、高齢者であるために健康・体力の衰えから、イベントの場が自宅から多少遠くなるだけでも、このような理由が多くなることは想像に難くない。これらの問題を、友人ができていない高齢者を趣味等に関する複数人が集まる活動に出向くように促すためには解消する必要がある。

5.2 最近新たに友人ができた高齢者からの知見

前節で検討したように、複数人が集まる活動への参加を促すだけでなく、参加したあとで高齢者同士の親密度を向上させるための支援も必要である。新たに友人ができた高齢者が、新しくできた友人と親しくなった要因の結果から知見を得ることができる。友人と親しくなった要因については、表8より、一緒に活動したり、会話したりすることが特に多い結果となった。この結果は、岡本の調査結果として確認された趣味の会等仲間内の活動や、友人とのつきあいが、新たな友人の獲得に効果的であることに通じるものである[22]。次に多い回答としては、価値観・考え方や、趣味、属性が共通することであった。それらの共通点があることは親しくなる可能性を高めるので、複数人が集まる活動で、共通点がある人同士を隣の席にしたり、同じグループにしたりすることは親密度を高めるのに効果的だと考える。

友人のどういうところに好意を感じるかについては、表9より、性格・人柄・人間性が最も多い結果となった。さらに、その詳細について、表10を見ると、全体的に、話しやすい・気楽に会話、気さく、気を遣わない等、居心地の良さが重要なことが見てとれた。また、経験・知識が豊富、前向き・積極的等、一緒にいることで情報を得たり、元気

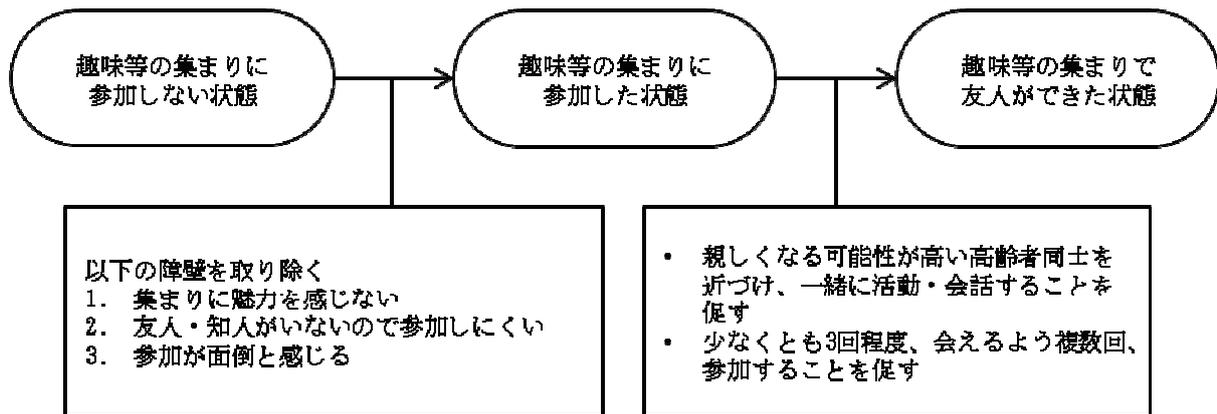


図1 高齢者の親密度向上支援モデル

になったりできることも重要なことを見てとれた。これらの事柄も、親しくなる可能性が高い高齢者同士をマッチングするために利用できると考えられる。

さらに、趣味等に関する複数人が集まる活動に参加してもらったり、その活動で出会った人とその後も会ったりする回数は、1回ではなく複数回の方が効果的である。親しくなるまでに会う回数については、一部の非常に多い回数の回答者の影響による影響が大きいため、中央値かつ最頻値である3回が一つの目安になると考える。

5.3 高齢者の親密度向上支援モデル

前節までの考察を踏まえて構築した高齢者の親密度向上支援モデルを図1に示す。高齢者の状態を、趣味等に関する複数人が集まる活動に行かない状態、趣味等に関する複数人が集まる活動に行った状態、趣味等に関する複数人が集まる活動で友人ができた状態の3つに分ける。そして状態を遷移させるために、どのような支援が効果的かを矢印の下に記述した。

友人ができていない高齢者は、趣味に関する複数人が集まる活動に参加できれば友人ができそうと考えているが、そのような活動に参加していない第一の理由は既知のイベントに魅力を感じていないためであることから、高齢者のイベントでは、それに参加した高齢者が、新たに友人を作ったり、楽しいと感じたり、何らかの利益を得たという情報を収集して参加していない高齢者に提示し、既知のイベントの価値に気づいてもらえるよう、これまで以上にWeb等での可視化を強化する必要がある。また、魅力あるイベントを見つけやすくする検索や Awareness に関する技術や、もしマッチするイベントがないのだとしたら高齢者の多様な趣味に関係するイベントを手軽に開催できるようにするシステムの具現化等が優先して取り組むべき課題であるとする。参加しない二つ目に多い理由としては、友人・

知人がいないため行きにくいということであるから、高齢者のイベントでは、一人での参加者を積極的に募集していることをWeb等でこれまで以上に告知するとともに、一人でもイベントに参加しやすいようイベントの形態をICTの力も借りてどうデザインするかを検討する必要がある。三つ目の理由は参加が面倒と感じていることであるから、高齢者の健康状態や体力を考慮し、できるだけ自宅から近い場所で開催されるイベントを高齢者に提示する必要があるが、現状では、友人ができていない高齢者の趣味にマッチしたイベント自体が少ない可能性があり、SNS等オンライン上での活動だけで多くの高齢者が満足できないのだとしたら、解決は容易ではないであろう。

複数人が集まる活動に参加した後は、価値観・考え方、属性等の共通点、性格等を考慮し、親しくなる可能性が高い高齢者同士のマッチングを行い、その結果を用いて同じグループにしたり、近くの席にしたりして新たな友人を作りやすいよう支援することが考えられる。また、一緒に会話することを促す際には、アイスブレイク等の手法を用いて、なるべく自己開示をさせるようにすることにより親密度の向上が見込まれる。自己開示については、二者間の関係が親密になるにつれて、相互に交換される自己開示の幅と深さが増大することを仮定する社会的浸透理論でも重視されている[23]。

さらに、親しくなる可能性が高い高齢者同士が少なくとも3回程度は会うように、趣味等に関する複数人が集まる活動に複数回、行くように促す必要があるように考える。その際のスケジューリング等にICTが有効そうである。

6. おわりに

本研究では、高齢者の親密度向上をICTによってどのように支援できるかを把握するために、Webによるアンケート

ト調査を、高齢者 412 人を対象に行った。調査では、最近新たに友人ができていない高齢者 206 人に対して、できない理由について質問し、友人ができた高齢者 206 人に対して、友人とどこで出会い、親しくなったきっかけは何で、どういうところに好意を感じるか、親しくなるまでに会った回数等について質問した。調査の結果、友人ができない理由については、きっかけがないことが最も多いことが分かった。また友人と出会うきっかけや場所については、趣味に関する場が多く回答された。親しくなったきっかけについては、一緒に活動・会話することや、共通の趣味・価値観・属性、偶然性等が多く回答された。どういうところに好意を感じるかについては、性格・人柄・人間性が最も多く、そのなかでも居心地の良さや、一緒にいることで情報を得たり、元気になったりできることが多く回答された。また、親密になるまでに会う回数は約 3 回であることが分かった。結果をもとにして、高齢者の親密度向上支援モデルを構築した。モデルは、高齢者の状態を、趣味等の集まりに行かない状態、趣味等の集まりに行った状態、趣味等の集まりで友人ができた状態の 3 つに分け、状態を遷移させるために、どのような支援が効果的かを明確にしたものである。モデルに基づき、支援技術について検討を行った。

参考文献

- 1) 日本の世帯数の将来推計: 平成 25 年 1 月推計, 人口問題研究資料第 329 号, 国立社会保障・人口問題研究所(2013).
http://www.ipss.go.jp/pp-ajsetai/j/HPRJ2013/hhprj2013_PRS329.pdf
- 2) 高齢者の会話の頻度: 平成 22 年度 高齢者の住宅と生活環境に関する意識調査, 内閣府(2010).
<http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/sougou/zentai/pdf/2-1.pdf>
- 3) 保坂隆: ひとり老後は「友活」で決まる, ベスト新書, KK ベストセラーズ(2010).
- 4) 注目のキーワード学生は就活, 若者は婚活, シニアは……友活 PRESIDENT 2011 年 5 月 2 日号.
- 5) 阿見・倉庫改装し「交流の場」開所 高齢者が友達づくり 2012/11/15 茨城新聞朝刊 A 版 pp.18.
- 6) 和田実: 高齢者の同性友人関係の性差, 老年社会科学, Vol.34, No.1, pp16-28(2012).
- 7) 澤岡詩野, 古谷野亘, 本田垂起子: 都市のひとり暮らし後期高齢者における他者との日常的交流, 老年社会科学, Vol.34, No.1, pp39-45(2012).
- 8) 村山陽, 安永正史, 大場宏美, 野中久美子, 西真理子, 李相侖, 渡辺直樹, 小宇佐陽子, 深谷太郎, 竹内瑠美, 倉岡正高, 新開省二, 藤原佳典: 小学生時の世代間交流が中学入学後の地域交流参加意識に及ぼす影響, 老年社会科学, Vol.34, No.3, pp.382-393(2012).
- 9) 山崎幸子: 閉じこもり研究の動向と課題, 老年社会科学, Vol.34, No.3, pp.426-430(2012).
- 10) 片桐恵子: 退職後の社会参加, 老年社会科学, Vol.34, No.3, pp.431-439(2012).
- 11) 岡本秀明: 高齢者の社会活動と開発された活動満足度尺度の得点との関連, 老年社会科学, Vol.35, No.1, pp.3-14(2013).
- 12) 豊島彩, 佐藤眞一: 孤独感を媒介としたソーシャルサポートの授受と中高年者の精神的健康の関係, 老年社会科学, Vol.35, No.1, pp.29-38(2013).
- 13) 斉藤雅茂: 高齢期の社会的孤立に関連する諸問題と今後の課題, 老年社会科学, Vol.35, No.1, pp.60-66(2013).
- 14) 菅原育子, 矢富直美, 後藤純, 廣瀬雄一, 前田展弘: 中高年者の就業に関する意識と社会参加, 老年社会科学, Vol.35, No.3, pp.321-330(2013).
- 15) 斉藤雅茂, 近藤克則, 尾島俊之, 近藤尚己, 平井寛: 高齢者の生活に満足した社会的孤立と健康寿命喪失との関連, 老年社会科学, Vol.35, No.3, pp.331-341(2013).
- 16) 片桐恵子: 過去の社会参加経験が現在の社会参加に及ぼす影響, 老年社会科学, Vol.35, No.3, pp.342-352(2013).
- 17) 山崎幸子, 藺牟田洋美, 野村忍, 安村誠司: 地域高齢者の閉じこもり解消に対する外出行動変容ステージの分類, 老年社会科学, Vol.35, No.4, pp.438-446(2014).
- 18) 小池高史, 鈴木宏幸, 深谷太郎, 西真理子, 小林江里香, 野中久美子, 長谷部雅美, 藤原佳典: 居住形態別の比較からみた団地居住高齢者の社会的孤立, 老年社会科学, Vol.36, No.3, pp.303-312(2014).
- 19) 久保昌昭: 施設建替えによる養護老人ホーム入所者の抑うつ度ならびに孤独感の変化に関する研究, 老年社会科学, Vol.36, No.3, pp.313-321(2014).
- 20) 岡本秀明: 地域高齢者の社会活動研究における概念定義と測定および活動参加促進要因, 老年社会科学, Vol.36, No.3, pp.346-355(2014).
- 21) 小林江里香: 日本の高齢者の社会参加は進んだか, 老年社会科学, Vol.36, No.4, pp.423-432(2015).
- 22) 岡本秀明: 地域における高齢者のインフォーマルな社会的ネットワーク形成に関連する要因, 社会福祉学, Vol.55, No.2, pp.11-26(2014).
- 23) Altan, I., Taylor, D.A.: Social Penetration: The Development of Interpersonal relationships, New York: Holt, Rinehart & Winston (1973).